

日本プロレタリア文学集・27



プロレタリア文学集・27

江苏工业学院图书馆  
藏书章

林多喜二集  
2

日本プロレタリア文学集・27

小林多喜二集 (二)

定価 二八〇〇円

一九八八年 一月二十五日 初版 ©

発行者 山 本 功

発行所 株式会社 新日本出版社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷四の二五の六  
電話 (〇三) 四二二一八四〇二(営業)

(〇三) 四二二一九三三三(編集)  
振替 東京 三一 一三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社  
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。  
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布  
することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の  
権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

日本プロレタリア文学集・27

小林多喜二集  
(二)



## 目次

独　房	五
母たち	二六
安　子	三六
転形期の人々	一七
断　稿	二九
沼尻村	三〇
党生活者	三六
地区の人々	四三

解 説	……	西沢舜一	四七
発表年月日と掲載文献	……		四九

## 独 房

色も別にそんなに變つていなかったが、約一年目に出てきたシャバは、矢張り知らずに彼を興奮させていたのだろう。これは、その田口の話である。別に小説と云うべきものでもない。

### ズロースを忘れない娘さん

誰でもそうだが、田口もあすこから出てくると、まるで人が變つたのかと思う程、饒舌になつていた。八ヵ月もの

間、壁と壁と壁と壁との間に——つまり小っちゃい独房の一間に、たった一人ッ切りでいたのだから、自分で自分の声をさけるのは、独り言でもした時の外はないわけだ。何かものをしゃべると云つたところで、それも矢張り独り言でもした時のこと位だろう。その長い間、ただ堰き止められる一方でいた言葉が、自由になつた今、後から後からと押しよせてくるのだ。

保釈になつた最初の晩、疲れるといけないと云うので、早く寝ることにしたのだが、田口はとうとう一睡もしないで、朝まで色んなことをしゃべり通してしまつた。自分では興奮も何もしていないと云っていたし、身体の工合も顔

S署から「たらい廻わし」になつて、Y署に行った時だつた。

俺の入つた留置場は一号監房だったが、皆はその留置場を「特等室」と云つて喜んでた。

「お前さん、いい処に入れてもらったよ。」と云われた。

そこは隣りの家がびつたりくっついているので、留置場の中へは朝から晩まで、ラジオがそのまんま聞えてきた。

——野球の放送も、演芸も、浪花節も、オーケストラも。

俺はすっかり喜んでしまつた。これなら特等室だ、蒸しッ返えしの二十九日も退屈なく過ごせると思つた。然し皆はそのために「特等室」と云つているのではなかつた。始め、俺にはワケが分らなかつた。

ところが、二日目かに、モサ（スリのこと）で入つてい



た目付のこわい男が、ニヤニヤしながら、自分の坐っている側へ寄って来てみれと云った。俺は好奇心にかられて、そこへズツて行くと、

「あそこを見る。」

と云って、窓から上を見上げた。

俺はそれで「特等室」の本当の意味が分った。

高い金棒の窓の丁度真ッ上が隣りの家の「物ほし」になつていて、十六七の娘さんが丁度洗濯物をもつて、その急な梯子を上つて行くところだった。——それが真ッ下から、そのまま見上げられた。

その後、誰か一人が合図をすると、皆は看守に気取られないように、——顔は看守の方へ向けたまま、身体だけをズツて寄つて行くことになった。

「ちえッ！ 又、ズロースをはいてやがる！」

なれてくると、俺もそんな冗談を云うようになった。

「共産党がそんなことを云うと、品なしだぜ。」

と、エンコ（公園）に出ている不良がひやかした。

よく小説にあるように、俺たちは何時でもむずかしい、深刻な面をして、此処に坐つてばかりいるわけではないのだ。この決してズロースを忘れない娘さんに対する毎日毎日の「期待」が、蒸しッ返えしの長い長い二十九日を、案

外の人気に過ぎさしてくれたようである。勿論その間に、俺は二三度調べに出て、竹刀で殴ぐられたり、靴のまま蹴られたり、締めこみをされたりして、三日も横になつたきりでいたこともある。別の監房にいる俺たちの仲間も、掃えりには片足を引きずつて来たり、出て行く時に何んでもなかつた着物が、背中からズタズタに切られて戻つてきたりした。

「やられた。」

と云つて、血の気のなくなった顔を俺たちに向けたりした。

俺たちはその度に歯ぎしりをした。然し、そうでない時、俺たちは誰よりも一番燥<sup>じ</sup>やいで、元気で、ふざけたりするのだ。

十日、七日、五日……。だんだん日が減つて行つた。

そうだ、丁度あと三日という日の午後、夕立がやってきた。

「干物！ 干物！」

となりの家の中では、バタバタと周章<sup>あわ</sup>ててるらしい。

しめた！ 俺はニヤリとした。それは全く天佑だった。

——今日は忘れるぞ。

兩戸がせわしく開いて、娘さんが梯子を馳け上がって行く。俺は知らずに息をのんでいた。

「畜生！ 何んてことだ、又忘れてやがらない！ 俺たちはがっかりしてしまった。」

「六号！」

その時、看守が大声で怒鳴った。

見付けられたな、と思った。俺はギョツとした。見付けられたとすれば、俺だけではない、これから入ってくる何百という人たちの、こっそり蔵いこんでいた楽しみが奪われてしまうんだ。窓でも閉められてみる、此処はそのまま穴蔵になってしまふ。

「調べだ。——出る。」

俺は助かったと思つた。そして元気よく立ち上がった。

三階に上がって行くと、応接間らしいところに、検事が書記を連れてやってくる。俺はそこで二時間ほど調べられた。警察の調らべのおさらいのようなもので、別に大したことはなかった。調べが終つた時、

「真夏の留置場は苦しいだろう。」

ないことに、検事がそんな調子でお世辞を云つた。

「ウ、ウン、元氣さ。」

俺はニベもなく云いかえした。——が、フト、ズロースの事に気付いて俺は思わずクスリと笑つた。然し、その時の俺の考えの底には、お前たちがいくら俺たちを留置場へ

入れて苦しめようたって、どっこい、そんなに苦しんでなんかいないんだ、という考えがあつたのだ。

「ま、もう少しの我慢ですよ。」

検事が靴をかかえこんで、立ち上るとき云つた。俺は聞いていなかった。

## 豆 の 話

俺はとうとう起訴されてしまった。Y署の二十九日が終ると、裁判所へ呼び出されて、予審判事から検事の起訴理由を読みかせられた。それから簡単な調査をとられた。

「じゃ、T刑務所へ廻つていてもらいます。いずれ又そこでお目にかかりましょう。」

好男子で、スンなりとのびた白い手に指環のよく似合う予審判事がそう云つて、ベルを押しした。ドアの入口で待っていた特高が、直ぐしゃちこぼつた恰好で入ってきた。判事の云う一言一言に句読点でも打つてゆくように、ハ、ハア、ハッ、と云つて、その度に頭をさげた。

私はその特高に連れられたまま、何ベンも何ベンもグルグル階段を降りて、バラックの控室に戻ってきた。途中、

忙がしそうに歩いている色んな人たちと出会った。その人たちは俺を見ると、一寸立ち止まって、それから頭を振っていた。

「さ、これでこの世の見おさめだけ、君。」

と特高が云った。

「二年も前に入っている三・一五の連中さえ未だ公判になっていないんだから、順押しに行くと同分長くなるぜ。」

俺はその時、フト硝子戸越しに、汚い空地の隅っこには、こりをかぶっている、広い葉を持った名の知れない草を見ていた。四方の建物が高いので、サンサンとふり注いでいる真昼の光が、それにはとどいていない。それは別に奇妙な草でも何んでもなかったが——自分でも分らずに、それだけを見ていたことが、今でも妙に印象に残っている。理窟がなく、こんなことがよくあるものかも知れない。

俺は今朝Nが警察の出がけに持ってきてくれたトマトとマンジュウの包みをあげたが、しばらくうつつろな気持で、膝の上に置いたきりにしていた。

控室には俺の外にコソ泥ていの髻をボウボウとのぼした厚い唇の男が、巡査に付き添われて検事の調べを待っていた。俺は腹が減っているようで、食ってみると然しマンジュウは三つといかなかった。それで残りをその男にやった。

「髻」は見ている間に、ムシャムシャと食ってしまった。そして今度はトマトを食っている俺の口元をだまってみて見つけた。俺はその男に不思議な圧迫を感じた。どたん場へくると、俺はこの男よりも出来ていないのかと、その時思った。

自動車は昼頃やつてきた。俺は窓という窓に鉄棒を張った「護送自動車」を想像していた。ところが、クリム色に塗ったナッシュという自動車のオープンで、それはふさわしくないハイカラなものだった。俺は両側を二人の特高に挟まれて、クッションに腰を下した。これは、だが、これまでで何百人の同志を運んだ車だろう。俺は自分の身のまわりを見、天井を見、スプリングを揺すってみた。

六十日目初めて見る街、そしてこれから少なくとも二年間は見ることのない街、——俺は自動車の両側から、どんなものでも一つ残らず見ておかなければならないと思った。

麹町何丁目——四谷見附——塩町——そして新宿……。

その日は土曜日で、新宿は人が出ていた。俺はその雑踏の無数の顔のなから、誰か仲間のものが一人でも歩いていないかと、探がした。だが、自動車はゴー、ゴーと響きかえるガードの下をくぐって、もはや淀橋へ出て行っていた。

前から来るのを、のんびりと待ち合せてゴトンゴトンと動く、あの毎日のように乗ったことのある西武電車を、自動車はセツカちにドンドン追い越した。風が頬の両側へ、音をたてて吹きわけて行った。その辺は皆見慣れた街並だった。

N 駅に出る狭い道を曲がった時、自動車の前を毎朝めしを食いに行っていた食堂のおかみさんが、片手に葱の束を保持って、子供をあやしなから横切って行くのを見付けた。

前に、俺はその食堂で、「金属」の仕事をしていた女の人と十五銭のめしを食っていたことがあった。その時、多分いま前を横切ってゆくその子供に、奥の方でコックがものを云っているのが聞えた。

「オヤ、この子供は今んちから豆ッて云うと、夢中になるぜ。いやだなア！」

そんなことを云った。

すると、一緒にめしを食っていた女の人が、プツと笑い出して、それから周章でて真赤になってしまった。

俺はそれをひょいと思ひ出したのだ。すると、急にその女の同志に対する愛着の感じが胸をうって来た。その女の人は今どうしているのだろうか？ つかまらないで、まだ仕事をしているだろうか。

自動車は警笛をならした。そこは道が狭まかったのだ。おかみさんはチョッとこつちを振りかえったが、勿論あれ程見知っている俺が、こんな自動車に乗っていようなぞという事には気付く筈もなく——過ぎてしまった。俺は首を窮屈にまげて、しばらくの間のうしろの窓から振りかえっていた。

「もう直ぐだ、あその角をまがると、刑務所の壁が見えるよ。」

——俺はその言葉に、黙って向き直った。

## 青い 襷

自動車は合図の警笛をならしながら、刑務所の構内に入って行った。

監獄のコンクリートの壁は、側へ行くと、思ったよりも見上げる程に高く、その下を歩いている人は小さかった。

——自動車から降りて、その壁を何度も見上げながら、俺はきつく帯をしめ直した。

皮に入ったピストルを肩からかけ、剣を吊した門衛に小さいカードと引きくらべに、ジロジロ顔をしらべられてか

ら、俺たちは鉄の門を入った。——入ると、後で重い鉄の扉がギーと音をたてて閉じた。

俺はその音をきいた。それは聞いてしまつてからも、身体の中に音そのままの形で残るような音だつた。この戸はこれから二年の間、俺のために今のまま閉じられているんだ、と思つた。

薄暗い面会所の前を通ると、その溜りから沢山の顔がこつちを向いた。俺は吸い残りのバットをふかしながら、捕かまるとき持っていた全財産の風呂敷包たつた一つをぶら下げて入つて行つた。煙草も、このたつた一本きりで、これから何年もの間モウのめないのだ！

晴れ上がった良い天気だつた。

トロッコのレールが縦横に敷かさつている薄暗い一見地下室らしく見えるところを通じて、階段を上ると、広い事務所に出た。そこで私の両側についてきた特高が引き継ぎをやつた。

「君は秋田の生れだと云つたな。僕もそうだよ。これも何んかのめぐり合せだろう。僕から云うのも変だが、何よりまア身体を丈夫にしてい給え。」

ずんぐりした方が一寸テレテ、帽子の縁に手をやつた。

ごじゃごじゃと書類の積まされた沢山の机を越して、窓

際近くで、顎のしゃくれた眼のひっこんだ美しい女の事務員が、タイプライターを打ちながら、時々こつちを見ていた。こういう所にそんな女を見るのが、俺には何んだか不思議な気がした。

持ちものをすっかり調らべてから、係が厚い帳面を持つてきて、刑務所で預かる所持金の受取りをさせられた。捕かまる時、オレは交通費として現金を十円ほど持つていた。俺たちのように運動をしているものは、命と同じように「交通費」を大切にしている。——印を押そうと思つて、広げられた帳面を見ると、俺の名から二つ三つ前に、知っている名前のあるのに目がとまった。それは名の知れている左翼の人で、最近どうして書かなくなつたのだろうと思つていた人だつた。ところが、此処にいたのだ。この人も！ そう思うと、俺は何んだか急に気が強くなるのを感じた。

それから「仮調所」に連れて行かれて、裸かにされた。チンポも何もすっかり出して、横を向いたり、廻われ右をしたり、身体中の特徴を記録にとられた。俺は自分でも知らなかつた背中のホクロを探し出された。其処で、俺は「青い着物」をさせられたのだつた。

青い着物を着、青い股引をはき、青い禪をしめ、青い帯

をしめ、ワラ草履をはき、——生れて始めて、俺は「編笠」をかぶった。だが、俺は禪まで青くなくたっていいだろうと思つた。

向うのコンクリートの建物の間を、赤い着物をきた囚人が一列に並んで仕事から帰ってくるのが見える。

俺は初め身体がどうしても小刻みにふるえて、困つた。

「どうだ、初めての着工合は……。」

と看守が云つた。

俺は、知らないうちに入っていた肩から力を抜いて、ゆつくり、大きく息を吸いこんだ。

「この廊下を真っ直ぐに行くんだ、——編笠をかぶつて。」

俺は看守の指さす方を見た。

長い廊下の行手に、沢山の鉄格子の窓を持った赤い煉瓦の建物がツツ立っていた。

俺はだまって、その方へ歩き出した。

ア.パ.ア.ト.住い

「南房」の階上。

独房——「No. 19.」

共犯番号「セ」の六十三号。

警察から来ると、此処は何んと静かなところだろう。長い廊下の両側には、錠の下りた幾十という独房がズラリと並んでいた。俺はその前を通つたとき、フトその一つの独房の中から低いしわぶきの声を耳にした。俺はその時、突然肩をつかまれたように、そのどの中にも我々の同志が腕を組み、眼を光らして坐っているのだ、ということを感じた。

俺は最初まだ何にも揃っていないガランドウの独房の中に入れられた。扉が小さい室に風を煽つて閉まると、ガチャンガチャンと鋭い音をたてて錠が下り、——俺は生れ始めて、たった独りにされたのだ。

俺は音をたてないように、室の中を歩きまわり、壁をたいてみ、窓から外をソツと覗いてみ、それから廊下の方に聞き耳をたてた。

誰か廊下を歩いてゆく。立ち止まって、その音に何時までも耳をすましていると、急にワクワクと身体が底から顫えてくる——恐怖に似た物狂おしさが襲ってきた。その時、今でも覚えている、俺はワツと声をあげて泣けるものなら、子供よりもモツと大声を上げて、恥知らずに泣いてしま

たかった。

しばらくして、赤い着物をきた雑役が、色々な「世帯道具」——その雑役はそんなことを云った——を運んできてくれた。

「どうした？ 眼が赤いようだな。」

と、俺を見て云った——

「なに、じき慣れるさ。」

俺は相手から顔をそむけて、

「バカ！ 共産党が泣くかい。」

と云った。

箒。ハタキ。洗紙で作った塵取。タン壺。雑巾。

蓋付きの茶碗二個。皿一枚。ワッパ一箇。箸一ぜん。

——それだけ入っている食器箱。フキン一枚。土瓶。湯

呑茶碗一個。

黒い漆塗の便器。洗面器。清水桶。排水桶。ヒシヤク

一個。

縁のない畳一枚。玩具のような足の低い蚊帳。

それに番号の片と針と糸を渡されたので、俺は着物の襟にそれを縫いつけた。そして、こっそり小さい円い鏡に写してみた。すると急に自分の顔が罪人になって見えてきた。俺は急いで鏡を机の上に伏せてしまった。

雑役が用事の最後に、ニヤニヤ笑いながら云った。

「お前さん今度が初めてだね。これで一通りの道具はちゃアんと揃ってるもんだらう。これからこの室が長い間のお前さんのアバ、アトになるわけさ。だから、自分でキチンキチンと綺麗にしておいた方がいいよ。そしたら却々愛着が出るもんだ。」

それから、看守の方をチラッと見て、

「へん、しゃれたもんだ、この不景気にアバアト住いだなんて！」

と云って、出ていった。

## 長い歐洲航路

監獄に廻わってから、何が一番気持ちが悪かったかときかれたら、俺は六十日目始めてシヤボンを使ってお湯に入ったことだと云おう。

湯槽は小ちんまりとしたコンクリートで出来ていて、お湯につかっているながら、スウイッチをひねると、ガチャン、ガタン、ガチャン、ガタン、ゴボン、ゴボンとスチームが入ってくるようになっていた。

入浴時間 十五分

規定の時間を守らざるものは入浴の順番取りかえることあるべし

警察の留置場にいたときよく、言問橋の袂に住んでいる「青空一家」や三河島のバタヤ（屑買）が引張られてきた。そんな連中は入ってくると、臭いジトジトしたシャツを脱いで、虱を取り出した。真黒なコロツとした虱が、折目という折目にウジウジウジウジとかがっていた。

一度、六十位の身体一杯にヒゼンをかいたバタヤのお爺さんが這入ってきたことがあった。エンコに出ている、飲食店の裏口を廻って歩いて、ズケ（残飯）にありついている可哀相なお爺さんだった。五年刑務所において、やっとこの正月出てきたんだから、今年の正月だけはシャバでやっ行って行きたいと云っていた。——俺はそのお爺さんと寝てやっっているうちに、すっかりヒゼンをうつされてしまった。それで、この六十日目に入るお湯が、俺をまるで夢中にさせてしまった。

房 そこは独房とちがって、窓が低いので、刑務所の広い庭が見えた。低く円るく刈り込まれた松の木が、青々とした

綺麗な芝生の上に何本も植えられていて、その間の小径の、あちこちに赤い着物が蹲んで、延び過ぎた草を呑気そうに摘んでいた。黒いゲートルを巻いた、ゴム足袋の看守が両手を後にまわして、その側をブラブラしながら何か話しかけていた……。夕陽が向う側の監獄の壁を赤く染めて、手前の庭の半分に、煉瓦建の影を斜めに落していた。——それは日が暮れようとして、しかもまだ夜が来ていない一時間の、すべてのものがその動きと音をやめている時だった。私はそのなごやかな監獄風景を眺めながら、ただお湯の音だけをジャブジャブたてて、身体をこすっていた。ものみんなが静かな世界に、お湯のジャブジャブだけが音をたてているのが、何かしら今だに印象に残っている。

次の日は「理髪」だった。——俺はこうして、此処へ来てから一つ一つ人並になって行った。

——この床屋さんは赤い着物を着ている。顔のちつとも写らない壊れた小さい鏡の置いてある窓際に坐ると、それでも首にハンカチをまいて、白いエプロンをかけてくれる。この「赤い」床屋さんは瘤の多いグルグル頭の、太い眉をした元船員の男だった。三年食っていると云った。出たくないかときくと、なアに長い歐洲航路を上陸をせずに、そのまま二三度繰りかえしていると思えば



何んでもない、と云って笑った。「アパート住い」と云い、又この「歐洲航路」と云い、ここにいるどの赤衣着物も、そんなことを自分の家にいるよりも何んでもなく云つてのける。

用意が出来ると、この床屋さんが後に廻りながら、「バリカンでジョキジョキやつてしまうぜ。」と云った。

それは分つていて……しかし云われてみると、矢張りギョツとした。

「頼む！ 少しは長くしておいてくれよ。」

「ここン中において、一体誰に見せるんだ。」

と云つて、クツ、クツと笑つた。

「そうか、そうか、分つた。面会にくる女があるんだろからな——」

それで俺の髪だけは助つた。然しこの理髪師はニキビであらうが、何んでもあらうが、上から下へ一気に剃刀を使って、それをそり落してしまつた。

俺がヒリヒリする頬を抑えていると、ニヤニヤ笑いながら、

「ここは銀座の床屋じゃないんだからな。」

と云つた。

## 赤色体操

俺たちは朝六時半に起きる。これは四季によつて少しづつ違ふ。起きて直ぐ、蒲団を片付け、毛布をたたみ、歯を磨いて、顔を洗う。その頃に丁度「点検」が廻つてくる。一隊は三人で、先頭の看守がガチャンガチャンと扉を開けてゆくと、次の部長が独房の中を覗きこんで、点検簿と引き合せて、

「六十三番」

と呼ぶ。

殿りの看守がそれをガチャンガチャン閉めて行く。

七時半になると「ごはんの用——意！」と、向う端の方で雑役が叫ぶ。そしたら、食器箱の蓋の上にワッパと茶碗を二つ載せ、片手に土瓶を持つて、入口に立つて待つている。飯の車が廊下を廻つてくるのだ。扉が開いたら、それを差出す。——円るい型にハメ込んだ番号の打つてある飯をワッパに、味噌汁を二杯に限つて茶碗に、それから土瓶にお湯を貰う。味噌汁の表面には、時々煮こまれて死んだウジに似た白い虫が浮いていた。